



TITLE:

名目派の貨幣論と貨幣の本質(二・完)

AUTHOR(S):

中西, 仁三

CITATION:

中西, 仁三. 名目派の貨幣論と貨幣の本質(二・完). 經濟論叢 1924, 18(3): 663-678

ISSUE DATE:

1924-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128136>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第三號 第十八卷

大正三十三年三月一日發行

論叢

- 所得稅の轉嫁……………法學博士 神戸 正雄
獨逸最近の社會學論……………文學博士 米田 庄太郎
獨占的海運同盟に對する政策……………法學士 小島 昌太郎
政治現象の本質……………法學士 恒 藤 恭
鎌倉時代の土地制度……………文學博士 三浦 周行

時論

- 自作農創定事業の意義と效果……………法學博士 河田 嗣郎

說苑

- 婚姻率に就いて……………經濟學士 岡崎 文規
名目派の貨幣論と貨幣の本質……………經濟學士 中西 仁三
客觀的勞賃論の史的發展……………經濟學士 森 耕二郎

雜錄

- 勞働者負傷の原因調査……………法學博士 河田 嗣郎
照應の理論と社會及經濟統計……………經濟學士 蜷川 虎三
フィジー島の原始共產制……………法學博士 河上 肇

名目派の貨幣論と貨幣の本質 (二完)

中西 仁 三

第三章 エルスター (E. Elster)

ベンヂクセンはクナツプの貨幣國定説を法律的に偏せる學說なりとして之れを補足して以つて眞の貨幣論を立てん爲めに貨幣の經濟的解説を試みたるものであるがエルスターの貨幣國定説に對する見解はベンヂクセンの其れとは多少異なる處がある。エルスターはクナツプの貨幣國定説中には單に法律的解釋のみならず貨幣の經濟的解釋をも含むものであつて唯殊更に之れを力說せなかつたに過ぎないものとして居る。故に國定説に對しては新しく貨幣の經濟學説を立てるの必要なく既に暗黙の裡に含まるる經濟的解釋を闡明すれば足るものとなすのであつて、彼は國定説中の支拂經濟及び支拂手段なる概念を襲用しつつ經濟的貨幣觀を樹立せんとするのである。

エルスターは貨幣の本質を捕捉する前提として二個の概念を設けて居る。一は團體經濟で二は社會的生産物である、彼れに隨へば今日の經濟組織は昔時の家族的個人的の經濟組織と異り財貨の生産は自己又は家族と云ふ如き限定されたる者の爲めに行はれず廣く團體構成員一般の爲めに行はれ其の消費も自己又は家族の生産せる物に依らずして團體員一般の生産によつて充當せらるるのである。即ちベンヂクセンの謂ふ生産團體消費團體と之れが連鎖としてクナツプの謂ふ支

14) Elster Seele des Geldes S 1-3 Einleitung

15) Elster a. a. O. S 10 以下

16) " " S 98 以下

拂團體の存在する事を以て現在の經濟組織の特徴と看做するのである。更にエルスターは社會各人の生産せし財貨は之れを一團として社會的生産物と稱して社會に存在する財貨全體を社會的生産物なる一の範疇の下に理解せんとするのである。各人の財貨の需要は此の社會的生産物によつて充され各人は自己の有する購買力換言すれば貨幣の分量に隨つて社會的生産物の分配を享くるものとする。

以上二つの前提よりしてエルスターは貨幣の本質を三様に解する事が出来るとして居る。¹⁷⁾ 一は社會的生産物に對する分配可能性 (als Beteiligungsmöglichkeit am Sozialprodukte) として、二は社會的生産物に對する分配手段即ち支拂手段として (als Beteiligungsmittel am Sozialprodukte, als Zahlungsmittel) 三は社會的生産物の分配標準即ち價值の單位として (als Betiehungsmass am Sozialprodukte, als Wertinheit) 解する事之れである。貨幣を靜態的に見れば社會的生産物に對する分配可能性となり、生産物が分配さるると云ふ點より貨幣の動態的に見れば社會的生産物の分配手段即ち支拂手段となる、分配標準即ち價值の單位として貨幣は財分配の基準となり今日の支拂經濟の成立の根原をなすものと見なければならぬ。

エルスターが貨幣の第一義の本質とするのは貨幣が社會的財に對する分配可能性と云ふ點にあつて他の二つの定義は此の第一義的本質として貨幣が現實に利用せらるゝ場合に於いて生ずる貨幣の職能と見るべきものと余は考へるのである。而して彼れが茲に謂ふ所の社會的生産物とはベンチタセンが云ふ如く賣却せられ得べき消費的財貨なりと狭く解せずして廣く有形財以外無形財

17) Ester a. a. O. S 25 以下
18) " " S 31 以下
19) " " S 70 以下

たる勤勞其他をも包含する廣義に解釋して居るのである。

以上は貨幣の本質換言すれば貨幣の魂 (Seele des Geldes) に關するエルスターの學說の要領なるが今之れを批評するに當つて其の前提概念たる團體經濟と社會生産物に就いて先づ考へて見よう。エルスターの云ふ如く現在の經濟組織を以つて昔時の家族經濟又は個人經濟とは別個の團體經濟と見て其の内容として消費團體生産團體を認むる事は妥當であらうか。團體なる語は團體員全體の行動を規律する統一的意思の存在を必要とするものである。然るに今日の經濟組織は依然として其の單位は團體自體の經濟に求むべきではなく個人經濟の活動に求めなければならない。所謂昔時の個人經濟組織と異なるのは交換なる一の經濟行爲によつて互に連結せられ其間有無相通じ恰も一團體の單一の經濟を形成せる如き外觀なきにしも非ざれども其の實は個人經濟の集合と見なければならぬ。更に團體經濟主義より當然來る社會的生産物なる概念も亦今日の經濟組織の下に生産せられたる財貨を一の社會的生産物なる範疇に包括する事も少しく奇妙なる感を吾人に與へる社會に存在する財は私有財産制度の認めらるる今日に於ては必らずや總て各人の私有なりとせなければならぬ。——公共團體の財貨は之れを社會的生産物と見る事を得るかも知れぬ——此等私有財貨の全體を社會的なる高き見地より見れば社會的の生産物と云ひ得ないではないが此等の私有財貨を殊更に社會的生産物なる概念の中に包含せしむる必要はなからうと考へらる。要之團體經濟及び社會的財貨なる概念は自由競争の行はるる個人主義的なる今日の經濟組織を説明するに恰好のものとは見難く之等は寧ろ社會主義の實現せられたる場合に於いて初めて適用せらる

べき概念ではなからうかと考へるのである。

以上の如き社會的生産物に對する分配可能性に貨幣の本質を求めんとするエルスターの貨幣學説は貨幣の職能 (function) と貨幣の本質とを混同して貨幣の職能を以つて直ちに其の本貨の如く即斷した嫌ありと云はざるを得ない。總て職能と本質とは必らず之れを嚴重に區別する事を要するもので水の H_2O なる本質を無視して水は吾人の渴を醫し人生不可缺のものなりと定義するのは水の効用を以つて水の本質と誤認せるもので學問上採用し得ないのである。貨幣を以つて吾人が財貨を購求し吾人の需要を満足せしむる事を得る事即ち貨幣が社會に存する財貨に對する配分の可能性を有し之れが配分の手段たる事を得るのは之れ畢竟貨幣が吾人の經濟生活に對して有する一の効用又は職能と見るを得べきもので他の一般財貨と異り貨幣の有する特性よりして當然生じ來る派生的効用とせなければならぬ。貨幣の有する此等の効用の背後に *Überbegriff* として存する貨幣の本質又は特性を求めなければならぬ。而て後初めて貨幣の社會的生産物に對する可能性なる意義をも了解し得べきものである。無論一物の効用又は職能は其の物の本質よりして演繹的に説明し得るが如く其の本質も亦其の効用又は職能より歸納せられ得べき事は否定せないが後者の場合に於ても本質と効用又は職能とを嚴重に區別して後初めて物の本質は了解せられ得べきものである。左ればエルスターが貨幣の社會的生産物の分配可能性又は分配手段たる點に貨幣の本質を求めたのは貨幣の効用又は職能と貨幣の本質とを混同せる誤解に基くものとして吾人の肯定し得ない處である。吾人は財の分配可能性たる貨幣の職能の根原たるべき貨幣が一般財

貨と異つて有する特性に貨幣の本質を求めんとするのである。

第四節 リーフマン (R. Liefmann)

リーフマンは在來の貨幣に關する金屬派の議論にもシナップよりベンチタセンを通じてエルスターに至る名目派の議論にも慚らず別個の見地に立つて新しく貨幣の議論をなすもので、彼は唯に貨幣論のみならず經濟學全般に亘つて彼れの獨自一個の觀點の下に解説を試みんとするのである。經濟學全般に關して彼れの採用した態度を一言にて批評するならば心理主義主觀主義と稱すべきであらう。

²⁰⁾ 彼れは經濟行為なる概念に就いても通説の如く財貨の生産とは解せず心理的秤量にして *Vergleich von Lust und Unlustgefühle* と解し費用と其れより得らるべき快樂 (*Lust*) 即ち効用とを比較

して如何にすれば最大の享樂 (*Genuß*) を得べきものなるかとの秤量、換言すれば享樂の遞減と費用又は犠牲の遞増との間に於いて費用又は犠牲を如何に配置すれば欲望の最大充足は期待せられ得べきものなるかの秤量と解するのである。費用に對する効用 (*Nutzen*) の餘剩を利得と稱する時は最大の利得を獲得せんとする心理的考量を稱して經濟と云ふのである。随つて貨幣に關する見解に就いても彼獨特の立場を維持するもので在來の貨幣議論とリーフマンの其れとの差異に就きて彼れ自身の語を以つてすれば次の如くなる。

²¹⁾ 吾人の貨幣概念の從來の學說と異なる處は吾人の解する經濟なる概念が在來の其れと異なるに等しきもので吾人は經濟なる概念は經濟行為の目的物即ち有限なる自然的財貨に由つて決せずして人

20) Liefmann Gold und Geld S27 以下

21) Liefmann Grundsätze der Volkswirtschaftslehre Band II S 96

問の考慮 (Denken) の特種なる表現形式として解すべきものである。如く貨幣も亦從來の貨幣學說に於ける如くに財貨自身の特性により又は國家の法律命令によつて貨幣となれる特種の財貨とは見ないのである。經濟財貨は其の効用性稀少性よりして生ずるものではなくして人間の一定の秤量によつて定まる様に又資本とは生産の各手段には非ずして貨幣を前提とする費用財の特種の計算方法である様に貨幣も亦國民經濟に於て財貨交換を媒介する實質的の支拂手段の一定量ではなくして一の觀念一の抽象であつて換言すれば流通交換に従事する各人が効用又は費用の比較の爲めにする一般的の計算單位で交換流通の結果として生じ又新しく行はるゝ交換行爲の基礎として價額及び所得が之に依つて表現せらるゝものである。

²²⁾ リーフマンに隨へば貨幣は之れを廣狹の二意義に解する事が出来る。之れを狹義に解すれば實質的代表的の支拂手段即ち貨幣的表券 (die realen vertretbaren Zahlungsmittel, die Geldzeichen) と見るべく之れを廣義に解すれば一般的の交換手段の利用せらるゝに至つて發達し今日に於いては一般的交換手段として作用する一般的の抽象的の計算單位 (Rechnungseinheit) と見るべく之れに依つて消費經濟にあつては費用を營利經濟にあつては利得を評價するを常とするものである。²³⁾ 今日の經濟組織にあつては信用取引の發達と金融機關の完備によつて財貨交換の媒介に狹義の貨幣以外に計算單位としての廣義の抽象的の貨幣を以てする事漸時増加する如き事情であるから貨幣を定義するに於ても之れを抽象的に觀察して其の本質を捕捉せなければならぬ。此の觀點よりしてリーフマンは貨幣を抽象的に見て一般的抽象的の計算單位 (allgemeine, abstrakte Rechnungseinheit)

22) Liefmann Grundsätze S 127

23) Liefmann a. a. O. S 102

となし消費經濟に於ては貨幣は唯一の一般費用財貨(Kostengut)として費用の單位(Kosteneinheit)費用と効用との比較の一般的名稱(Gemeinnemer der Nutzen- und Kostenvergleichung)を解すべく營利經濟に於ても亦費用及び効用の計算の代用(Substitute)たるべきものと解すべしとするのである。唯前者に於ける貨幣的計算は心理的に(消費經濟ノ所得ト對照シテ)行はるゝものなるに反して後者に於いては其の貨幣的計算は分量的に數字的に單なる貨幣分量として行はるゝの差異は存するのである。リーフマンは心理的に觀察して貨幣を一般的抽象的の計算單位と定義する様に左右田博士も論理的に觀察して貨幣を以つて價値の客觀的の表現(abstrakte Ausdruck des Wertes)と定義せらるゝは兩者推論の過程を異にしつゝも結論に於て一脈相通するものありさせなければならぬ。

リーフマンの經濟學的特質は各人の主觀に突入し其處よりして經濟學の體係を組立てんとする處にあつて在來の經濟學は各人の主觀的の要素を無視せりとの批難を受くるとすれば彼れの經濟學は餘りに個人の主觀に拘泥し社會科學としての經濟學の客觀性を無視せりとの譏を甘受せなければならぬ。²⁵⁾リーフマンは貨幣價值論として貨幣數量説が貨幣價值の決定原因としての貨幣の數量を重要視したる事を攻撃して貨幣の價値を決定するは各人の所得格の大小にして貨幣の分量ではなく財貨を購買するは貨幣に非ずして所得なりとして居る。假令貨幣數量同一とするも各人の所得増加する時は財貨に對する需要増加し財貨の價値は騰貴し貨幣價値は下落せざるを得ないと稱して居る。²⁶⁾然れ共今日の貨幣經濟の社會にあつては各人の所得は必ずや貨幣の形を藉らなければならぬ所得に由つて財貨を購買するものとしても其れは必らずや貨幣を通じて行はるゝも

24) Shoda Geld und Wert S. 135

25) Bendixen Währungs politik und Geldtheorie in Lichte des Krieges S. 147

26) Liepmann a. a. O. S. 104以下

のでなければならぬ。今日の所得なる概念は貨幣を無視しては考ふる事を得ないものではなからうか。然れば假令各人の所得が財貨購買の資源なりとしても所得は必らずや貨幣提供なる形を藉りて始めて財貨の需要として表はれ貨幣及び財貨の價值に影響を及すべく所得の大小が貨幣の價值を決定するものとしても貨幣數量の増減を仲媒として間接的に決定するに過ぎないものとななければならぬ。故に貨幣の價值は所得の大小に由ると云ふよりも寧ろ貨幣の數量に由ると云ふを適當と考へられる。

次に所得の大小に由つて貨幣の價值に大小ありとするリーフマンの説に依れば各人が貨幣に對して認むる主觀的又は個人的の價值を説明する事は出來得る。即ち主觀的個人的貨幣價值は各人の所得の大小如何によつて同一の貨幣量に對して異なるもので所得の小なる人の貨幣に認むる價值は所得の大なる人の其れとは異ならざるを得ないものである。²⁷⁾然し一般に貨幣價值と云ふ場合には各人の主觀的個人的貨幣價值とは獨立せる社會的客觀的の貨幣價值を指示するものと見なければならぬ。リーフマンの説を以つてする時は此の如き意味の貨幣價值は之れを説明し得ざるものである。更に今日の貨幣は獨り個人の經濟的考量を基として其の本質を捕捉する事を得るであらうか。貨幣は無論クナブの云ふ如くに國家又は法律の創造する處なりとはなし得ないが今日の貨幣は國家及び法律の背景を沒却しては之れを考へ得ないものである。されば個人的觀察以外に國家の貨幣政策及び國家の維持する貨幣制度と云ふ點よりも貨幣を觀察して初めて全きを得べきでリーフマンの如く主觀的個人的經濟學の見地よりして貨幣の客觀的社會的の本質及び國民經

27) Bendixen a. a. O. S143-144

濟上の貨幣の職能を無視しては現在の貨幣現象を説明するに充分なりとなすを得ないものである。
 一般價值を論ずるに當つて財貨の効用を個人的主觀的の認識の限界よりして客觀的の價值現象を
 説明せんとする限界効用説は價值論として採用し得ないと等しく餘りに主觀的個人的觀察を偏重
 して貨幣の客觀性社會性を無視するリーフマンの貨幣論も妥當なるものとはなし得ないのである。
 近來經濟學研究上心理的解説を容るゝ傾向の存在するのは「ロツシャー」²⁸⁾「マーシャル」²⁹⁾云ふ如く經
 濟學の研究對象は經濟財なると同時に人間其れ自身なる點より見て喜ぶべき現象なりと云ふべき
 である。古典學派の經濟學者が經濟人なる實在せざる觀念的の人格を豫想し此の前提の下に經濟
 學を組立てたるの缺點より見て現實の人間性の心理的の考察は決して無用視し得べきものでない
 とは云へ餘りに人の主觀的個人的の心理現象に囚はれて其の結果經濟及び經濟行爲の社會性客觀
 性を無視して社會科學としての經濟學の使命を忘却するに至るが如き事は寛容し得ない處と云は
 なければならぬ。

リーフマンは貨幣を以て一般的抽象的の計算單位となし左右田博士は價值の客觀的表現として
 兩者共に貨幣を價值の單位となす點に於て一致する様である。貨幣の職能の一として價值の標準
 又は價值の單位たる事を認むる事を普通とする。³⁰⁾價值單位の發生を以てつ貨幣の發生と見具體的
 の交換媒介手段としての貨幣假令存在せなくても價值の單位存在すれば既に貨幣存在すると説く
 人もある、然し貨幣は價值單位の一定量を具體化し財貨の價值の相互比較を可能ならしめて其の
 間の交換を媒介するものと云ひ得べしとするも發生的に之れを考察する時は具體的なる交換の媒

28) Roscher Grundlagen de Nationalökonomie S. 1

29) Marshall Principles of Political Economy P. 1

30) Laughlin Principles of Money P. 9 以下

Lieftmann a. a. O. S. 134

31) Conrad Handwörterbuch de Staatswissenschaften II Auflage Art. Geld v. n. C. Menges S. 82-84

介手段たる貨幣存在して後に價值の單位發生したるものと見る方適切と考へらる。財貨の直接交換の不便を自覺して貨幣の發生を促せる時代に於いては具體的なる貨幣の存在なくして抽象的な價值の單位を考へ得べきものだらうか。勿論貨幣及び信用制度の發達の結果は價值の單位を實質的より名目的に觀念するに至り此の名目的の價值の單位を具體化して交換媒介手段としての貨幣を制定するものなりと云ひ得べしとするも發生的に見れば價值單位の先行概念として具體的の貨幣なるものを認めなければならぬ。故に交換媒介手段としての具體的なる貨幣よりして生じ得べき抽象的の價值段位を以つて貨幣なりと定義する事は本末顛倒の議論とせなければならぬ。無論貨幣の職能として價值單位と交換媒介手段と何れが先にして何れが後なるやは輕々に論じ得ないが吾人は後者を以つて前者に先んじて生じたる貨幣職能で後者生じ其の自然の結果として前者生ずるに至つたものと見るを妥當と考へるのである。

エルスターの貨幣定義に就いて述べた如くに貨幣の効用又は職能と貨幣の本質とは之れを嚴格に區別するを要するもので總ての經濟的價值が其の統一的客觀的表現を求むるに至つた事は貨幣に於いて價值單位たるに適する特性の存在する事を認むるに至つた結果である。故に價值の單位に貨幣の本質を求めんとする學説は貨幣の有する特性より派生する貨幣の効用又は職能を以つて貨幣自體と誤解するより生ずる謬説であつて價值の單位たる職能を行はしむる貨幣の特性の中に貨幣の本質を求めなければならぬ。延長の單位たる尺重量の單位たる貫其れ自身を以つて度量衡器とする事を得ずして尺又は貫を具體化せる實在を以つてせなければならぬ如くに價值の單

位と云ふ如き抽象的概念を以つて貨幣なりとは定義し得ないものである。貨幣は之れを構成する材料如何は論ぜないとしても必らずや具體的の實在でなければならぬ。價値の單位自體が貨幣ではなくして之れを具體化したるものでなければならぬ。

リーフマンは貨幣なき支拂の行はるゝ事の漸時増加する結果として貨幣は之れを抽象的に考察せなければならぬとして居るが此の如き場合に於いて貨幣と稱するのは支拂手段としてその具體的の貨幣（鑄貨銀行預金通貨）等を指示する様である。以上の如き貨幣を使用せずして行はるゝ支拂に在つても終局に於いては何等かの形式にて貨幣の授受せらるゝ事に因つて債權債務の決定的の償却行はるゝものとせなければならぬ。債權債務の相殺によつて賣買行はるゝ場合に在つては全然貨幣の使用なくして唯貨幣的評價又は計算の行はるゝに過ぎないもので之等の場合をも貨幣概念中に包含せしむる爲めに貨幣を抽象的に觀察する必要はなきものと考へらる。

第三章 結 論

ヘルフェリッヒに隨へば貨幣を定義せんとするには二の方法がある。一は貨幣が有する各職能を比較對象として貨幣の本質に關係するものなるや否やを考察して貨幣の本質的職能と派生的職能とを區別し派生的職能を除外して本質的職能のみより歸納して貨幣の本質を求むる方法であり二は國民經濟なる有機體を出發點とし貨幣が此の有機體中に有する地位よりし貨幣の本質を求む之れを定義せんとする方法である。以上兩者何れの方法に依るも結論は同一とならなければなら

ない。

貨幣の職能として普通列擧せらるゝものは、(一)貨幣が財貨交換の媒介をなす事。(二)價值の尺度となる事。(三)一方的價值移轉の手段となる事。(四)資本貸借の手段即ち延期支拂の手段となる事。(五)價值の貯藏及び一般財貨の資本化の手段たる事等である。以上各種の貨幣の職能を一樣に見て其の間に本質的なと派生的なとの區別をなさない説もあるが上記の職能中には貨幣の本質的職能に附隨して當然生じ來たもの又は今日の經濟組織に於ては殆んど價值なきもの例へば價值の貯藏の手段たる貨幣の職能の如きものもある以上は之等を一樣に貨幣の職能として區別せずに論ずるのは當を得たるものと云ふを得ない。左れば之等の職能を本質的のものゝ派生的のものゝに分つて論ずる方正鵠を得たものと云ふべきであらう。然らば如何なる職能を以て本質的のものゝとし如何なる職能を以て派生的のものゝとなすべきかに就いて各人の觀點に隨つて異なるのは論を俟たないのである。

²⁾ ジンゲルに依れば貨幣の起原は一方的の支拂手段たるに在りとして財貨の交換が貨幣の媒介に依つて廣く行はるゝ以前に於いても領主又は君主に對する貢納罰金等の納付に貨幣使用せられ此の如き一方的支拂手段として使用せられたる貨幣が遂に財貨交換の媒介手段に轉用せられて今日の貨幣が生ずるに至つたものゝとして居る。即ち貨幣が一方的の價值移轉の手段たる點に其の本質的職能を認めんとするのである。

³⁾ ラフリンに依れば貨幣は交換媒介手段たる以前に價值の標準として表はるゝものゝとして交換媒

2) Singer Geld als Zeichen S 68 以下

3) Langhain Principles of Money P. 7 以下

介手段としての貨幣よりも價值の標準として貨幣が先行するものなりとして居る (Standard of value preceded medium of exchange)。随つて彼れは價值の標準たる點に貨幣の本質的職能を求めんとするのである。而て交換媒介手段としての貨幣と價值の標準としての貨幣は現在に於いては必しも同一ではない。兩者各異つた貨幣を以つてせらるゝ場合がある即ち具體的の貨幣としては價值の標準たる貨幣存在せずして單に交換の媒介手段たる貨幣のみなる場合があるとして居る例へば我國に於いては價值の標準は金貨一圓であるが此の如き貨幣は現實に存在するものではない。

ヘルフェリツヒに依れば貨幣の職能としては一般的交換媒介手段と一般的の價值の標準と一般的支拂手段との三つを掲げて居る。今日の經濟組織の下に在つては一般的の交換媒介手段として貨幣の職能特に顯著で之れを貨幣の唯一の本質的の職能と觀るべく他の二つの職能は共に派生的附隨的の職能となすべしと論じて居る。

メンガーも亦交換媒介手段としての職能を以つて本質的のものとして他の貨幣職能は之れより派生するものなりと論じて居る。

現在の經濟社會に於ては貨幣は財貨交換の媒介手段としての職能を以つて本質的のものとすることを適當なりと考へらるゝのである。貨幣を發生的に見れば財貨の交換媒介手段たる以前に或は一方的の價值移轉の手段とし又は價值の標準としての貨幣の發生せる場合ありと主張する議論の正しとせられ得る場合あるかも知らない。然し貢納罰金其他の公課の納付に際して一定の財貨使用

4) Laughlin P 19 以下

5) Hellferich a. a. O. S 242

6) Conrad. Handwörterbuch de Staatswissenschaften Art. Geld S 80.81.

せらるゝ習慣生じたとするも之れを以つて直ちに貨幣既に存在せりと主張する事の適否は多少疑問とせなければならぬ。又財貨交換の媒介手段としての貨幣發生以前に抽象的に價値の單位なるもの存在し得るや否やに就いては「リーフマン」の貨幣説を批評するに當つて既に述べた處である。貨幣の職能に就きて其の本質的なるや派生的なるやを區別するに當つては現在の經濟社會に於いて貨幣の存在する目的よりして之れを判斷すべきもので發生的に見たる場合を論據として論ずるのは不適當と考へらる。今日貨幣の存在する目的は財貨の直接交換の不便を除く爲めに一般的に財貨交換の媒介手段たる點に存在する事は貨幣經濟組織の本質よりしても自明の理とせなければならぬ。故に吾人にヘルフェリツヒ及びメンガーに隨ひ貨幣の本質的職能を財貨交換媒介手段たる點に求めんとするのである。

以上の如く貨幣の本質的職能は財貨の交換媒介手段たる點にありとするのであるが之れは要するに貨幣の有する一の職能であつて之れを以つて直ちに貨幣の本質なりと即斷する事は不可能である。此の如き職能を貨幣をして行はしむるに至つた處の貨幣が他の一般財貨と異りて有する特性の中に貨幣の本質を求むべきである。何故に各人は自己の所有する財貨を貨幣提供者に交附するかと云へば貨幣を以つてすれば何時にても必要に應じて各種の財貨を他人より購求し得べしとの信念を有するが爲めである。換言すれば人々は自己の財貨の對價として得らるべき貨幣を以つてすれば自己の財貨に對する需要を充足する事を得べしと各信念するが爲めである。此の如き信念は貨幣を構成する素材の價値に基く場合もあるべく又社會的慣習國家及法律の命令に基く場合

もあるべく其の原因は一に非ずとするも要するに貨幣流通の根源は貨幣を以つてすれば何時にても財貨を購買し得べしとの信念に在りさせなければならぬ。一般財貨にあつても他の財貨と交換し得べき可能性は存在するが物々交換に於いて見らるゝ如く其の交換の可能性は著しく局限せらるゝものである。然るに貨幣に於ては財貨を購買し得べき可能性は無制限に存在するものである事よりして一定財貨を必要とせない人々は之等の財貨を貨幣と換へ置き更に來るべき財貨の需要に對して具へんとするのである。之れ貨幣を媒介手段として財貨の間接的交換の行はるゝに至つた所以なりとするのである。

貨幣の本質は貨幣を以てせば何時にても財貨を購買し得べき可能を信じ之れに對して財貨を提供する處に換言すれば貨幣は其の當時に成立せる價額に隨つて無制限に財貨を購求し得る力即ち貨幣の有する一般的購買力に求めなければならぬ。要之貨幣とは一般購買力の一定量を具體化する一の表章と見なければならぬ。

次に貨幣が國民經濟なる有機體に於いて有する地位を考察するに現在の經濟生活は價值生活と云ふべく經濟價值の比較對照に基き交換を以て結合せる生活と云ふべきである。現在の經濟生活の特質はリーフマンに隨へば貨幣的計量(Geldrechnung)貨幣的評價(Geldliche Vorausschlagung)が總ての財貨に就いて行はれ貨幣的評價を通じて一般の經濟活動の行はるゝ點に求むべきである。現在の經濟活動の行はるゝ點に求むべきである。現在の經濟活動經濟生活は貨幣價值を中心とし之れを標準として行はるゝものであるから左右田博士が貨幣を無視しては現在の經濟制度は之れ

7) Liefmann Beteiligungs und Finanzierungs gesellschaft S 9-13.

8) Shoda Geld und Wert. S 163 以下

を説く事を得ずとさるゝは宜なりとせなければならぬ。

財貨の生産も分配も交換も總て一度貨幣價值に換價せられ之れを媒介の手段として初めて行はるゝもので總ての經濟價值は其の中心を貨幣價值に求むるものである。何故に現在の經濟活動は其の目標及び支持點を貨幣に求めなければならぬかと云へば貨幣が何時にても財貨と交換せられ得べく貨幣が一般的購買力を有する結果貨幣が一般的客觀的價值の支持者たる點に在りとせなければならぬ。貨幣の價值の一般的客觀的なるよりして財貨の價值は必らず一度此の客觀的一般的貨幣價值に換價せらるゝ事によつて種類の異なる財貨の價值は唯分量的にのみ異なる貨幣價值に表現せられて初めて各人の主觀より放れたる客觀的存在を主張するを得るに至るものである。

貨幣が現在の經濟組織に於て有する地位とは貨幣が客觀的一般的價值の維持者たる點にして之れを中心とし手段として經濟價值は統一され客觀化するものである。而て貨幣價值の客觀性一般性は畢竟するに貨幣が如何なる財貨をも購買し得る貨幣の購買力の一般的なる特性よりして來るものなりとせなければならぬ。左れば貨幣の本質は其の購買力の一般性に求むべく貨幣とは一般購買力の一定量を具體化する一の表章なりとせなければならぬ。

要之以上貨幣の本質を求むる二つの方法即ち貨幣の本質的職能より歸能するも亦貨幣が國民經濟なる有機體に於いて有する特殊の地位よりするも貨幣を以つて一般購買力の一定量を具體化する表章なりと見るべく其の構成材料如何は貨幣の本質には何等關係する處なく唯一般購買力を具體化するものなる以上は之れを貨幣なりと解さなければならぬ。鑄貨銀行券紙幣のみならず信用通貨をも貨幣概念中に包括せしめて廣義に貨幣を解釋せなければならぬのである。